

「自宅療養」実は入院拒否

毎日 26 日朝刊 1 面は、さいたま市の 73 歳の男性が 2 時間半で容体が急変し、自宅療養死したことを報じている。男性は高血圧の基礎疾患があったが、保健所は自宅療養を続けるよう伝えたという。埼玉県の自宅療養者は 18 日現在で 1 万 5354 人。東京都 (2 万 2210 人) に次いで多く、首都圏の 1 都 3 県の自宅療養者だけで全国の約 6 割を占め、減る兆しは見えない。第 4 波の医療崩壊で多くの犠牲者を出した大阪府も、新規感染者とともに自宅療養者も急増している。自宅療養者は 25 日、1 万 6003 人となり、最多だった第 4 波のピークの 1 万 5031 人 (5 月 11 日) を超えた。感染者急増を受け、府は 13 日から宿泊療養施設への入所を制限。40 歳未満は軽症や無症状で基礎疾患など重症化リスクがなければ自宅療養を基本とするよう改めた。療養基準の見直しにより自宅療養者の増加に拍車がかかったとみられる。

朝日 24 日朝刊オピニオンで、東京工業大学教授の中島岳志さんが自宅療養について発言している。抜粋して紹介する。

「自宅療養」とは、一般的には症状が安定した時に病院から出て自宅でゆっくり静養する、という意味でしょう。今回は入院の選択肢が奪われており、自宅療養とは言えないはず。「入院できません」という一種のトリアージ (治療順位の選別) で、「入院拒否」とか「入院謝絶」、あるいは別の言い方をすべきです。といっても医療現場は懸命な活動をされており、問題は政府の側にあります。

安倍内閣と菅内閣は一貫して言葉を破壊しています。びっくりしたのが「桜を見る会」の問題で安倍首相が「募っているという認識」だが「募集しているという認識ではなかった」と答弁したこと。人間社会は言葉によって成立しているのに、これを壊してしまうと、いろいろなことが成り立たない。菅首相も先日の広島での平和記念式典のあいさつで重要な部分を読み飛ばし、しかも気がつきませんでした。彼は、書いてある言葉を意味のあるものとして読んでいないのでしょうか。言葉の意味が破壊されていると思います。

「自宅療養」という言い方にもそれが表れています。二つの政権は、歴史の中で使われ積み重ねられてきた言葉の意味内容を壊し、意味のないものにしようとしています。いまの状態でも、政治ができることはたくさんあると思います。PCR 検査を拡大し、早期診断と早期治療を進める態勢をつくることもそう。抗体カクテル療法が有効なら、外来でも使えるようにする。コロナ対策に特別措置法が必要なら、国会を開く。

重症化リスクの低い人は自宅でなんとか、ではなく、諸外国にならって大型医療施設をつくり、そこで対応することも考えるべきです。東京の大手町で自衛隊の医官たちがワクチン接種をしています。彼らは野戦病院で治療する訓練を受けた、日本で有数の能力を持った医者たちです。彼らにワクチン接種だけでなく、大型医療施設で活躍してもらうのは、政治的には十分できる話だと思います。

(2021 年 8 月 27 日)